

F. W. A. フレーベル『母の歌と愛撫の歌』の 教育方法学的検討

－「遊戯の歌」(24)－(32)に見られる子どもの「精神」の成長－

児 玉 衣 子

序

本論は、同一主題の下にフレーベル著『母の歌と愛撫の歌』¹⁾を取り上げて本学紀要第25号および第27号に発表している一連の検討の第3回目であって、今回は「遊戯の歌」(24)「子どもとお月さま」から(32)「窓」までの歌を取り上げる。

同書に関して、彼はこの書の内に子どもの成長のさまざまな過程を設けたと述べている²⁾。そして、子どもを常に一人の「全体」と捉えつつも、とりわけ「身体」「自己感情の表れとしての他者との人格的關係」「精神」の三側面を教育的配慮の下においている³⁾。

そこで「身体」「他者との人格的關係」「精神」の順に同書の内容を検討して現在に至っており⁴⁾本論は、子どもの「精神」に関する言及や配慮を、同書の大部を占める「遊戯の歌」全50編の内、(24)－(32)の歌について検討するものである。これらの歌を一連のまとまりとして取り上げる根拠については註5)に挙げる論文に述べており、それを参照して頂けると幸いである。

本論の展開は以下のとおりである。

I 各歌の内容検討

各歌の内容とは題詞、詩、絵（欄外装飾画）、「欄外装飾画の説明」（以下「説明」と略記）の総体である。この内容を次の3つの観点から検討する⁵⁾。

1. 主人公の子どもについて、子どもの発達的に特徴的なあらわれをどのようなことに見出しているのか、それに対してどのような身体的、精神的配慮が語られてるのか。
2. 子どもに語り聞かせるわけではないが、母親自身の心の内に持つべき内容としてどのような内容が語られているのか。また、その語られるフレーベルの思想的背景が推測されるか。
3. その他、方法的に注目すべきことがらがあればその検討。

II (24)－(32)の歌の本書における構成上の特徴

(24)－(32)の歌が、本書における子どもの「精神」の成長の第二段階第二区分と見られることについては既に述べた⁷⁾。しかし、各歌の内容面における構成上の特徴については50編全体の内容検討を終えないと可能ではないので今回も行わない。

ただし、本区分を本書全体の構成という観点からみると特徴が認められるので、そのことについて述べたい。

I 各歌の内容検討

(24) 「子どもとお月さま」

〈主人公の子ども〉

子どもの年令については特に言及されていない。しかし、「説明」には神経が苛立ってむずかっているような時に月を見るとふっと落ち着きを取り戻す、あるいはまた月を見ることそれ自体を喜ぶ、そのような幼児の姿が捉えられている。

このような幼児の姿は、(1)「足をばたばた」の生後6ヵ月位以来、歌とともに成長して(23)「塔の上の子どもたち」、つまり、この(24)の歌の手前に至って、漸く遊びの仲間集団の正式メンバーになったことが伺われる主人公の子ども(5才位と思われる)の姿⁹⁾よりも、ずっと以前の時期から認められる。

しかも、次の(25)の歌では、後述するように、幼児の二語文が捉えられているのに対して、この(24)の歌では、詩は母親からの(月を代弁した)語りかけのみで成り立っている。そこで、子どもが月を喜んで見てはいても言葉自体はまだそれほど出ていない時期、すなわち1才前後ではないかと思われる。

子どもが自分でも訳がわからずに陥る不機嫌、気難しさ、無愛想等については、(32)「騎手と不機嫌な子」においても言及される。その際には、月を見ることは子どもの注意をすばやく他のものに振り向けて不機嫌を忘れさせるひとつの手段として語られる。それに対してこの(24)の歌では、月子どもを見守り子どもの喜ぶ明るい光を送る人格的存在として、母親および保育者によって子どもに語りかけられる。そして、詩の終は「愛には愛が報われる」と、子どもから月への愛が励まされて締め括られる。

〈母親・保育者〉

「説明」の中の呼びかけは「思いやり深い子どもたちの保育者よ」と言われる。つまり母親に限定されない。

フレーベルは、子どもの月を見たいという激しい衝動を、成人の「より高い光を見ようと欲し、その光の中に、それに囲まれて生活しようと思う我々の心の衝動の表現である」と捉えている。つまり、乳幼児期から認められる月を見たいという衝動は、早くから注意深く「明るい光によって見守られている」という人格的關係と保護感とをもって導かれるならば、成人後の、精神的光明への信頼とその希求という人間ならではの価値観に繋がっていくと理解している。

光のこのような精神的理解は、フレーベルにおいては、基本的にはやはりイエスを光と捉えるキリスト教の宗教的理解に基づいていると考えられる⁹⁾。彼自身においても確信されている宗教的理解を基底として光の精神的意義が彼の教育の内容および目標とされているからこそ、(24)–(32)の一連の歌は、後述するように「遊戯の歌」50編の中核部分に据えられていると思われる。

(25) 「小さな男の子と月」

〈主人公の子ども〉

「説明」の題は「一才半の男の子と月」である。この詩の冒頭には“Mond gehen”という子どもの二語文が入れている。すなわち「お月さまが上る」という感歎でもあり「お月さまに行きたい」という希望でもあり、という子どもの気持をあらわすところの二語文である。このような二語文は今日の日本においても1才後半頃から出てくるとされる¹⁰⁾。

また、絵では、月へ行くために梯子のところへ母親を引っ張ってゆき、梯子を指差して出してほしいと催促する子どもの姿が描かれている。このような自分では動かせないものを自分にとりもろうために大人を伴って目当てに向かって直行する行為も、また指差しも、この頃の子どもに認められる行為であって、知恵づきとひたむきさに感心しつつ微笑ましい。

この絵も歌もフレーベルが親しく見聞した事実に基づいているという。題詞の冒頭にフレーベルは「なぜ空間では遠い事物が小さい子には最初近く受けとめられるのだろう なぜ小さい子はあんなに憧れて 遠いものと一つになることを願うのだろう……宇宙の事物が子どもから背くまえに 子どもがそれらと一つになることを見出し、外面的に事物が子どもから離れないうちに内面的に一つになることを育み 認めるようにさせるとよい……大宇宙のすべてとひとつに感じる子どもの甘い夢を妨げるな」と語る。

〈母 親〉

フレーベルは母親に向かって「私たちは月や星のある夜空に対する子どもたちの注意と喜びを、今よりも遙かに慎重に育むべきだろう」という¹¹⁾。

その内容として挙げられるのは、一方で星辰を球体や宇宙の遊泳といった科学的見方で捉えるとともに、他方で星空を見てその創造者の本質を感じ、知覚し、読み取るようにさせることである。外面的な現象に統一的な内的生活を見て取って喜ぶような年令の子どもには、そのようにしてあげることが必要であるという。

フレーベルは宇宙を人間と神とを媒介するものと捉えている¹²⁾。そこから彼は、科学的把握に発展することもなく、また、子どもの内的生活の発展にも結びつかないところの星辰理解、(例として星を黄金の鋏と教えたり、月を人間と教えたりすることが挙げられている)を斥けて、「真理は決して害を与えない。これに反して誤謬はそれが後に真理に導く時にさえも、常に害を起こす」と述べている。

フレーベルは乳幼児期の「精神」の特徴を、子どもの認識が感情や情緒に導かれ支えられて成長していくという形で、これまでの歌においても様々に示してきた。この歌では人間の客観的な精神のあり方と主観的な精神のあり方とは根本的な矛盾や対立を孕むのではないのであっていずれをも大切にするべきこととしており、乳幼児期の「精神」の特徴にあわせて既に乳幼児期から配慮するべきことがらとして私たちに注意を促している。

児 玉 衣 子

(26) 「二才前の女の子とお星さま」

〈主人公の子ども〉

「説明」の題では「二才の女の子とお星さま」になる。

この詩に歌われている内容は実際に生じた出来事でフレーベルにとって余程印象深い出来事であつたらしく、これ以外にも言及されている¹³⁾。そして、何が印象深かったのかというと、誰もこの子に星と両親とを結びつけて教えていないのに、この子が星をみて「お父さん星とお母さん星」と叫んだことであつた。

おそらくフレーベルはこの出来事に、先の(25)の歌においても既に強調しているところの子どもの今ひとつの精神的特質、すなわち自分の周囲の事物や現象を自分の生活経験にあてはめて、人間的な関係において理解しようとする特質を発見したのだと思われる。

〈母 親〉

子どもは自分を取り巻くどんなものにも人間的関係を見つけて喜ぶ。また、そのように見ようとする激しい衝動をもつ。この衝動をできる限り長い間、徐々に育てていって、題詞に強調しているように「そこに生きており、そしてすべてのものの中に働いているのはひとつの精神である」という感情を子ども達の内に発展させることは、その子達の情操と生命とを強めるものである、以上のようにフレーベルは解説している。

子どもがあらゆるものに人間的感情や相貌、あるいは人間的関係等を見出そうとすることについては、今日においても子どもの心理的特性として把握されている。しかし、フレーベルはそれに止まることなく、子どもが、それらのあらゆるものに働くひとつの精神を感じて統一の中に自分も在ることを予感してこそ、子どもの生命は生き生きと強くなるとするのである。

(27) 「壁にうつる光の小鳥」¹⁴⁾

〈主人公の子ども〉

壁に手鏡などの反射光をあてて動かす遊びである。題詞に母親から子どもに向かって「忘れないで、見るものすべてが、すぐに捕らえられるのではない」といわれる。また、詩では「壁にうつる小鳥はただの明るい光、手では掴めない、ただ目で見て心で楽しもう、手では掴めないが柔らかい心なら掴めるものがたくさんある、それが手にも心にもためになる」と歌われる。

上述の内容は、さらに「説明」で次のような親子の対話例によって具体化される。すなわち、この絵を真似て遊ぶならば子どもが遊びの中で手で捕まえることのできるものとして、鬼ごっこにおける逃げ手、昆虫網に捕らえられた蝶々等が指摘される。

その上で、対話は、手では捕らえられないが心で捕らえられるものの話に、以下のように導かれる。

母親「(絵の) 二人は、向こうの湖に沈んでいく太陽の光をもっと長く留めておきたいと思って

いるの。できるかしら。」

子「捕まえられないなんて思っているの？ 太陽はずっと遠くだし、光だけなのに」

母親「でも二人は自分の中にしっかり捕まえています」

子「いいえ、ママ、それはできません」

母親「ええ、目で、自分たちの心の中にです。お前はパパがこの前旅に出られる時、とてもやさしい目でさよならを言われたのを覚えていませんか。つい最近お前が『パパはまだ帰ってこないの？』と尋ねた時、それを私に話し、自分でも心の中にパパの面影をみたではありませんか」

子「ああ、ママ、そうです。パパがここにいなくても、僕は心の中にパパを見えています」

母親「ね、そうでしょう、パパがここにいなくても、お前はパパの愛（Liebeを太字強調）を見て、それをしっかり持つこともできるのです。」

子「ええ、しっかり持っています、ママ。」

以上のような会話が成立するのは、ある程度ではあれ過去、現在、未来の時間観念や愛という抽象的観念の理解が可能になっていなければ無理である。この意味で、ここで母親と対話している子どもは、(23)「塔の上の子どもたち」に見られるような5才位までに成長した子どもと思われる。

〈母 親〉

フレーベルはここで、人間が各部分に区画されるにしても結局は分割されないひとつの全体であることを再び説く。そして、子どもも生命の統一性と全体性を真に生き生きと生きるところから部分への注目や部分の養育へと進むこと、また、乳幼児期に生命の統一性と全体性とを生き生きと生きることが全生涯にわたる精神的身体的発達にとってこの上なく重要であるとともに、子どもの生活がそれを示しそれを願っていることを語る。

その上で、手足と感覚器官とは働きが異なってはいっても互いに反応しあっていることに注意が促され、感覚器官の中でも視覚の身体各部の活動刺激への大きいことが語られる。

さらに、視覚と聴覚との連携¹⁵⁾、視覚と身体活動と味覚との連携等の例示の後、各感覚自体が根源的には統一され、分割されないことが語られる。

その後、フレーベルは、視覚について、魂としての人間の本質が見る感覚となっていると述べて、精神的な意味における健康な目の重要さとそのための訓練（注意して見る）の必要とを説く。そして、視覚の発達は子どもの内的外的幸福にとって、精神と生命の育成の根源として、魂の育成の真の中心点であるという。

ここから、フレーベルは、いよいよすべての保育の出発点と中心点に入ったと述べる。つまり、本書全体の核心とも言うべき部分であることを予告してその内容を以下のように述べる。すなわち、私たちはこの母の歌と愛撫の歌によって子どもの生命の健康と温かい感情とを保ちながら、「見る」という言葉の多方面な、最高の意味において、見るように、また、感じるようにさせようと思う。なぜなら、見ること、視点を集中して見ること、全てのものを見ること、温かさをもつ

児 玉 衣 子

て見ることに、すなわち愛をもって愛の下に見ることに、それはまことに実在の、いやさらに神の、そして永遠に好意をもって先を見通す愛の最高の性質なのである。

以上のように述べて、フレーベルは、視覚を愛という精神的行為に結びつけて感覚器官の中でも視覚の重要性を位置づけるとともに、保育の出発点と中心とは愛であるという。それだけではない。彼はこの文章によって愛を乳幼児期から育てる方法をも述べているのである¹⁶⁾。

〈方法的に注目すべきことがら〉

フレーベルはここで人間の成長について、再び、統一性および全体性を打ち出している。また、魂の健やかな成長が感覚器官、とりわけ視覚の注意深い使用と深く関わっていることを述べた上で、視覚使用の訓練として注意深く見る（視点を集中して、全てを）および温かさをもって見る、という見方を打ち出している。

今日、人間の身体自体が太陽の光で体内のリズムを調節する機能をもつことが明らかにされる¹⁷⁾ほどに、また、視覚の受け取る刺激は人間の感覚器官全体で受け取る刺激量の大部を占めるともいわれるほどに¹⁸⁾、光は人間に大きな影響を与えていることが明らかにされている。

その意味で、フレーベルが人間と光との関わりを乳幼児期から重視し、また、視覚を感覚器官の中でも重視し、さらに、視覚と精神の成長とを結びつけていることには、単に宗教的意味合いに限定されない今日的な理解への先見性さえ感じられる。

しかし、それにも増して注目すべきは、幼児期の視覚教育の内容として、注意深く見ること（科学的観察眼）とともに温かさをもって見る（感情を伴う精神）という二つの見方の存在を示し、二つの見方を共に育てることを幼児期の課題としていることだろう。一般的に学校教育が科学的観察眼の育成に重点をおくのに対して、幼児期の教育の特色が打ち出されているということができる。

それとともに、乳幼児の「徐々に目覚めゆく精神の認識するもの」¹⁹⁾は感情と結びついている、という方法論にもつながる彼の洞察は、今日なお幼児教育の基本として常に確認されるべきであろう。

(28) 「小うさぎ」

〈主人公の子ども〉

遊びは指で兎をつくって壁に映し出す影絵遊びである。兎の姿を壁に綺麗に出すのは主人公の子どもにはまだ少し難しいようで母親がして見せると解説される。確かに両手指の形や組み合わせ方は易しくはない。しかし、今日の日本の場合ではあるが指の巧緻性の発達してきた5才児であれば面白がって挑戦すると思われ、その意味で、3、4才位をイメージしているのではないかと思われる。

フレーベルによれば影絵は一般に子どもの視覚を訓練する遊びとして知れ渡っており、そこで彼も同じ意図とともに身体の運動や姿勢の訓練をも意図しているという。

〈母 親〉

影絵遊びの外面的楽しさは、白壁に射す明るい光の間にひとつの暗い、眼に見えない物体が入り、それが光によって壁の上に人を喜ばせる形を現わすようになることである。

では、それによって内部の予感する情操に対して言い表わされるように見えるものは何だろうか。それは、暗くて隈なく照らし出すのは難しい生命や地上の姿も、摂理する神の精神の光の中で観察されるとき、平静な明るい情操の持ち主には、より高い生命の姿としてはっきりと見えてくるものだ。

以上のような内容を述べて、フレーベルは、人生で遭遇する不条理の暗闇も、より高い精神から見たときには在る姿として受けとめる在り方への信頼を育てることを述べる。そして、そのような「光と闇」理解の最初のところに影絵遊びの意義を置いている。

(29) 「狼」・(30) 「猪」²⁰⁾

〈主人公の子ども〉

題詞に「子どもは動物の様子をじっと見るのがとても好きだ。そんな時の子どもの純粋さを大切にしろ」と語られる。歌は狼および猪の生態を歌って手で狼および猪の影絵をつくる。

保育者と母親に対して、題詞に注意したように、動物の生活の中の野卑な欲望の激しく、陰しく、まぶしいところにさらされて、子どもの神経や想像力が過度に刺激されて羞恥心が傷つけられないように、また、眠っている誤解が呼び覚まされないように注意することが必要であることが、まず語られる。

その上で、子どもに早くから気づかせたいことがらとして、「あらゆる動物はその生活段階に忠実に、自然の生活や要求に応じながら発達し、行動するという。だから動物の生活は、植物の生活も同様であるが、非常に健康で新鮮で快活であるということに注意させる」ことが挙げられる。

また、動物の野卑なまぶしい現象については、以上のような大人の配慮の内にあるなら、子どもは本来もっている純潔を保ちながら無邪気に自然現象の横を通り過ぎ、「動物は人間よりも知識が劣っている」という真理をわかるようになる。以上のように説かれる。

〈保育者・母親・両親〉

フレーベルは、動物の生活から学ぶことがらとして、さらに次のように語る。すなわち、動物はその発達段階において静かに、従順に、単純にそれ自身の天職と使命を実現する。同様に人間もまた既に子どもの頃から、その発達段階に応じて天職と使命 (Beruf und Bestimmungen) を実現しなければならない。あらゆる発達段階は定められた通りに実現されるべき、避けて通れない要求をもつ。だから、子どもが、将来、多面的な義務を果たせるようにこれらのことを感じさせておくことは重要である。

さらに義務に関してフレーベルは、人間はどんな年令においても必ず何かに従事しなければな

児 玉 衣 子

らない自分自身の義務をもつ。そして、この義務の遂行は負担ではなく心身を強め、義務遂行の自覚は独立心を与え、ついには光と高い賜物へと導く、と理解している。それゆえに彼は、「子どもが自分の小さな義務をはたす際に生じる集中する、見渡す、本質を育む、等のことに伴う幸福感とともに、遂行したときの幸福感、親との親和感等を培うように」と勧めている。

子どもは、義務を果たせた自分に対して誇らしい喜びを表すものであるが、それは大人から励まされ喜びを共にされることによって子どもの今の心性を形づくるだけではない。その延長線上に大人に成長した後の心性もあることを信頼してフレーベルの勧めはなされているのであろう。

(31) 「小窓」・(32) 「窓」

〈主人公の子ども〉

遊びは二つの歌とも両手指を広げて格子状に重ねて、その隙間から太陽光を見ろというものである。

「小窓」の題詞では「窓から光を見ることがなぜ子どもの心を幸福にするのだろう、清明から人生はさかえる、清明な生活で子どもをつつむように母は努めよ」といわれる。

そして、「小窓」の絵では、子ども達が明るい小窓に切り抜き紙を押しあてて眺め入っていたり、格子状に組んだ棒の隙間から瓶の水面に反射する光を見たりしている。

さらに、歌詞では「小窓から室内に入る光線が子どもを喜ばせる、(だから) お前も本当に可愛くきれいにしなくては」と、透明で明るい光線に心を躍らせる子どもの姿とそのような光線の前に立つ子どもの在り方が勧められる。

太陽や月を人格化した表現はこれまでにもしばしば出てきた ((6)「チックタック」(13)「鳥の巣」(14)「花かご」(24)「子どもとお月さま」) が、この歌になると太陽光線自体が人格的に捉えられている。そして、この太陽光線自体の人格化は、次の(32)「窓」の歌詞において、最高度に発揮されることになる。

(32)「窓」になると、題詞に「ひとつの一致した生命であるという子どものかすかな予感を養え、自分がその一部であるという確かな感情を伸ばせ、外的なものでなく内的なものを信頼させよ…」と語られる。

また、歌詞では上述のように太陽光線が母親によって子どもに「お前に会いたくて急いで走ってやってきた、私を避けるな」というように人格的に語りかける。

なお、筆者にとって(32)の絵に描かれている場所がどのような場所を想定して描かれているのか不明である。御教示いただけると幸いである。

〈母親・父親〉

フレーベルは、子どもが指の隙間、切り抜き紙、編んだ鉋屑の隙間等から光を眺めるのが好きなことを捉えて、子どもに生じるこれらの行為は、見る者の内部の目や光の発達に比例してのみ精神的な光を見たり感じたりできるようになるという精神と情操の特性を明らかにしていると理

解する。

そして、霊と情操と精神の形成において、(29)(30)の歌では野卑なものの目覚めが避けられ、(31)では純粋な清明なものを喜ぶ心を育てたように、ここでは清明な輝くものを喜び、より高いもの、より気高いものへの理解が目覚めさせられるべきであるという。

そこから、子どもは「純潔な心でいることは最も峻峻な高所だ」と予感しているようであるから、母よ、早くから子どもの力を強めよ、父よ、早くからそのためにあなたの手を子どもに差し伸べよ、と両親にむかって要請がなされる。すなわち、父親に対しても子育てへの参加が要請される。フレーベルが「父親よ」と呼びかけるのは、この(32)の歌が最初である。

さらに、軽率や不注意によって光が精神や心情のなかに入るのを取り逃がすなと語られて、積極的に光を求めて外に出ることが勧められる。

〈方法的に注目すべきことがら〉

上述のように、この歌で初めて父親に対して、子育てへの独自の役割を担った参加が呼びかけられる。このことに関しては既に「他者との人格的關係」の検討においても明らかになったところを述べた²¹⁾。

それに付け加えることになるが、この(32)の歌では、父親の役割は、子どもの霊と情操と精神の形成において野卑なものが避けられ、清明なものが喜ばれ、より高いものへの理解が目覚めさせられるように手を差し伸べることとされている。そして、このような意図をもって子どもを外へ連れ出すことが、父親に対して勧められている。

この後に、註4口の論文で既に述べたが、(33)―(41)の一連の仕事や労働の真似遊びの歌が入ることになる。つまり父親の役割として、具体的にも象徴的にも「外の世界」と子どもとを仲介し、また、「外の世界」へと子どもを導くことが求められているといえるだろう。

II (24)―(32)の歌の本書における構成上の特徴

1 (24)―(32)の歌の「遊戯の歌」における不連続性

「遊戯の歌」において、(1)―(23)の歌は、既に見てきたように、その中で主人公の子どもが生後6ヵ月位から歌とともに漸次成長して5才位にまで至る様子が伺われた。

ところが(24)―(32)の歌は、子どもの発達という観点からすれば今までの延長線上にまったく置き得ない。なぜなら、(24)……1才位、(25)……1才半位、(26)……2才位、(27)……5才位、(28)……3、4才位と見られるからである。つまり(23)までの歌からすれば(24)の歌に入ると、突然、年令的に逆戻りをすることになる。

また、(24)―(32)の中においても、(24)(25)(26)と年令的に順次くるが(27)で一足とびに大きくなり、(28)で再び逆戻りしてから(29)(30)(31)(32)と次第に5才位まで行く。

これは、明らかにそれまでの配列とは発想が変わっていることを示している。すなわち、フレーベルは今度は主題別、ここでは「光」という主題のもとに歌を並べていることが明らかになる。

2 (24)–(32)の歌の本書における構成上の特徴

イ 「遊戯の歌」全体の中での中央の位置に関して

「光」に関するこれら一連の歌においては、光の科学的理解と心情的理解、光と視覚、感覚器官と身体、眼と愛、一人の人間の精神と情操と霊との統一的、全体的形成等がさまざまに語られる。教育という人間の意図的業において人間の精神と情操と霊との統一的、全体的形成を実現しようとするフレーベルは、彼にとってこの意味での最高の人間像を、神でもあるイエス・キリストに置いている。その意味で、彼の宗教的確信は彼の教育における理想的人間像に反映しているといえるゆえに、(24)–(32)の「光」と関わる人間形成のための論は、彼の信じるキリスト教における光＝キリスト理解とも相まって、本書における子どもの養育の中心をなすと考えられる。

このことを実際に本書の構成上にも実現するために、(1)–(23)の子どもの発達順という配列（生後約半年から順次5、6歳まで）から一転して、光という主題による配列を選んでいるのであらうと考えられる。

しかも、この一連の歌が占める「遊戯の歌」全体の中央部という位置についても、彼の「中心」理解によれば、中心とは全体に影響を及ぼしつつそれ自体最も強調的な意味をもつとされているので²²⁾、意図的位置であらうと考えられる。（図イ参照）

ロ (24)–(32)の中の中心的な歌の存在

上述のように(24)–(32)の歌は子どもの発達年令的にみても順列ではない。このことは、子どもの「精神」の成長の第一段階（(1)–(10)）と第二段階第一区分（(11)–(23)）とを実に精密につなぎあわせて発達年令順の一連とする構成がなされていることを見出した後では、奇異な感じすら受ける²³⁾。

この奇異な感じを起こさせる最大の原因は(27)の歌の位置である。同歌は、上述の要約からも伺われるように、これら一連の歌の中で光、視覚、魂、愛、等の関わりをフレーベルが最も詳しく解説しているばかりでなく、実際の子育てにおけるそれらの方法化についても語っている歌である。それゆえにこそ、発達順を破ってでもこの位置に置いていると思われる。すなわち、(24)–(32)（子どもの「精神」の成長の第二段階第二区分）における最も強調的な歌であって「遊戯の歌」全体の中央に位置づく、つまり本書中、最も強調される歌として置かれていると思われる（図ロ参照）。

註

歌題については、これまで通り荏司雅子訳「母の歌と愛撫の歌」（『フレーベル全集』5巻、玉川大学出版部刊）を用いさせていただいた。但し、註1)に述べる初版と目される本の目次にならい、荏司訳では(29)「狼」「猪」となっているのを(29)「狼」(30)「猪」と分け、以降、歌の番号を1番ずつずらせて用いさせていただいた。

本書中の文言については荏司訳および茅野蕭々訳『母の歌と愛撫の歌』（岩波書店刊、1934）を用いさせていただいたが、訳語につき、理解の異なる語については拙訳を用いさせていただいた。

- 1) 『母の歌と愛撫の歌』は、フレーベルが自らの開発した幼児教育を紹介するために著した唯一の単行本であるが、いつ発行されたのかについては初版に記載がなく不明である。

但し、同書の絵のひとつ(19「親指でひとつ」)にその絵の制作年が1842と記されていること、および同書に関する彼自身の言及が1847年の保育者養成学校案において見出されること等から、1842年から1847年の間であろうと思われる。

本論の底本に用いているのは京都大学教育学部所蔵の初版と見られる書である。この書を初版と判断するのは以下の理由による。

- ① 絵(銅版画)が真正の銅版画であること。
- ② 絵の中の所定の位置に文字が印刷されているのであるが、各絵の上下中心点に針様の穴が空いており、固定され使用された痕跡を残している。これは絵と文字との二度刷りのために穴のできたことを推測させる。
- ③ 米国のThe National Union Catalogue, Pre-1956 Imprints, Vol.186, Mansell, 1972, P.376に記載されている初版本と次の4点で一致する。
 - (イ) 発行年の記載がない。
 - (ロ) 本のサイズ。但しこれについては先年、表紙を取り替えた際に業者が縁を削りサイズが若干変わったが、1985年に筆者が測定した際には記載通りであった。
 - (ハ) 本の枚数が頁でなく葉で数えられている。
 - (ニ) 扉絵以下、絵の葉と解説の葉との順序と葉数。

京都大学所蔵本は、ドイツの古書店からの購入時(大正5年)から、表紙および裏表紙の絵についての解説があるにも拘らず無地の表紙がついていた。つまり購入時から表紙が付け替えられたものであったと推測される。その表紙が先年さらに取り替えられたわけである。

- 2) 荘司雅子訳「幼稚園教育学」『フレーベル全集』4巻、玉川大学出版部、1981、673頁。
- 3) F.Fröbel, Mutter-und Koselieder, Bl. 60. 荘司訳256頁、茅野訳133頁。
- 4) イ、拙論『『母の歌と愛撫の歌』における動作の系統性』『日本保育学会第41回大会論文集』、1988。
ロ、拙論「F.W.A. フレーベル『母の歌と愛撫の歌』における子どもの『他者との人格的關係』の発展」『人間教育の探求』4号、日本ベスタロッチャー・フレーベル学会、1991。
ハ、註5)の拙論。
ニ、註6)の拙論。
ホ、註8)の拙論。

以上を経て今回の本論に至っている。

- 5) 拙論「F.W.A. フレーベル『母の歌と愛撫の歌』の教育方法学的検討—子どもの「薄明るくなり始めた精神の認めること」について—」『乳幼児教育学研究』1号、日本乳幼児教育学会、1992。
- 6) 『北陸学院短期大学紀要』第25号掲載拙論に設定した観点によって50編全体を見ていくことになり、今回もその一連である。

児玉衣子「F.W.A. フレーベル『母の歌と愛撫の歌』の教育方法学的検討—『遊戯の歌』(1)–(10)に見られる子どもの『精神』の成長—」『北陸学院短期大学紀要』25号、1993。

- 7) 註5論文参照。
- 8) 『北陸学院短期大学紀要』第27号掲載拙論参照。
児玉衣子「F.W.A. フレーベル『母の歌と愛撫の歌』の教育方法学的検討—『遊戯の歌』(11)–(23)に見られる子どもの『精神』の成長—」『北陸学院短期大学紀要』27号、1995。
- 9) ヨハネによる福音書1章1–9節、『フレーベル全集』3巻、20頁。
- 10) 田中昌人・田中杉恵『子どもの発達と診断』3巻、大月書店、1984、106–107頁参照。
- 11) フレーベルは幼子が喜んで星や月や太陽を眺めることを重要に捉えて「誕生と同時に授けられた自然観察と宇宙観察の最初のそして真の始まりだからである」とも語っている。
『フレーベル全集』4巻、103頁。
- 12) 『フレーベル全集』4巻、87頁。

児 玉 衣 子

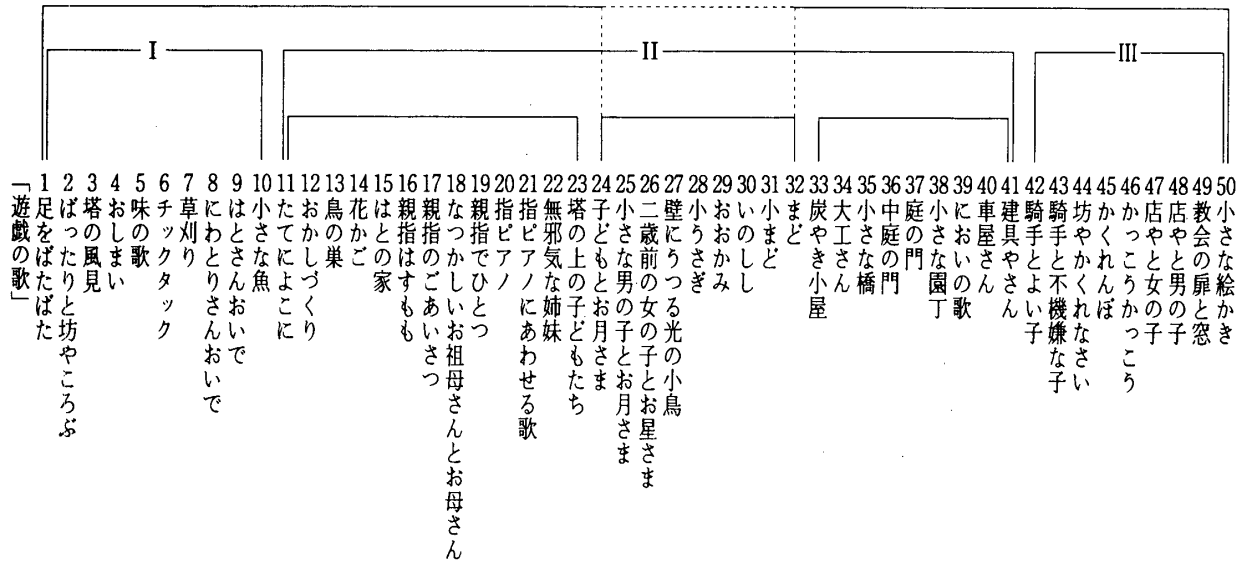
- 13) フレーベル著、荒井武訳『人間の教育』(上)、岩波文庫、1964、88-89頁。『フレーベル全集』3巻、362頁。4巻、103-104頁等。
- 14) 光の輝きを小鳥と呼ぶことについては『人間の教育』(上)、85頁。『フレーベル全集』4巻、102-103頁等参照。
- 15) 『人間の教育』の頃には聴覚から視覚へとされているが、本書ではもっと細やかな把握が語られている。『人間の教育』(上)、85頁参照。
- 16) 光、認識、創造的衝動の関係について次のようにも語られている。「見ること、認識すること、直観することは光を必要とし、光を前提とし、いわば光そのものである。こうして人間の内にある創造的で注意深い活動衝動を十分に育むことから、認識・光、すなわち人間の内にある光や彼の周囲にある光が発展するのである。」続けて生命、愛、光、神の関係についての彼の考えも述べられている。『フレーベル全集』4巻、26-27頁。
- 17) 朝日新聞、1996.8.18.日曜版の記事による。
- 18) 味覚、触覚、嗅覚等と視覚との結びつきの強さをも考えに入れるとこのようにいいうるだろう。視覚の受けとめる刺激量が他の感覚器官に比べて圧倒的に多いことについては、藤嶋昭、相澤益男編著『光のはなし1』技報堂出版、1986、130-135頁参照。
- 19) Wahrnehmenn seines heraufdammernden Geistes, Mutter-und Koselieder, Bl.60.
- 20) フレーベルは幼児期に親しい野性動物として兎、りす、小鹿等を挙げているが、狼や猪等を挙げてはいない。それだけに本書にこれらの野性動物を入れたのにはそれなりの意図が感じられる。ひとつの解釈として註4ロに挙げた拙論がある。
- 21) 註4ロの拙論。
なお、精神と光と父親の結びつきについては『フレーベル全集』4巻、256-259頁にも歌われる。
- 22) 『フレーベル全集』4巻、439-443頁参照。
- 23) 「北陸学院短期大学紀要」25号および27号掲載の拙論参照。

なお、本稿は日本ペスタロッcher・フレーベル学会第14回大会個人発表に基づいている。

図

イ)

「遊戯の歌」全体の中心的位置



ロ)

